

メモ

【二】放送を聞いて、後の問いに答えなさい。

「傘^{かさ}」と「雨」の関係（合計日数を100日とした場合）

人	雨が降る 30日	雨が降らない 70日
傘がある 40日	ア 29日 (12日)	イ 11日 (28日)
傘がない 60日	ウ 1日 (18日)	エ 59日 (42日)

メモ

二、 読附

「二 次」の文章は、主人公枝田光輝が、「えだいち」と呼ばれてクラスに打ち解けられるようになったにもかかわらず、母の仕事の関係で引越しをしなければならなくなったときの話です。これを読んで後の問いに答えなさい。

引越しと転校の話は、椎野先生の耳にも入った。ぼくがここにいられるのは、夏休みがはじまるまでということだった。あと少ししかないから、思いきり後悔しないようにたのしもう、という考えには、どうしても至らなかった。逆に、あと少ししかないから、もういいんだ、と思ってしまう。

少し前のぼくに戻ったと思えばいいんだ。えだいちというあだ名や草野球や飼育委員なんて、全部うそだったんだ。ぼくは I、だからもう気付かない幽霊みたいな子どもで、それが本来の自分だったんだから、また元に戻るだけなんだと考えるようにした。ぼくは三丁目の空き地に行かなくなった。これからはもう二度と行けなくなるんだから、早いうちに慣れておこうと思った。ぼくは、子どもらしい純粋さと単純さで、自分が少しでも傷つかないほうを選んでいた。

「えだいち、どうしたんだ。元氣ねえなあ。」

押野は陽気に接してくれたけど、ぼくはかたくなだった。押野とのたのしい思い出を、もうこれ以上ひとつも増やしたくなかった。押野のお姉さんが、新しいデザートを作ってぼくを誘ってくれたけど、ぼくは首を振った。

① この短かったのしいときを、早く忘れてしまいたかった。グッピーは子どもを産んだけど、あとのことは亀山さんと、二人組に任せた。親とべつにするのが遅くなつて、赤ちゃんのうちの何匹かは、親に食べられてしまった。飼育委員はもちろんだったけど、クラスメイトみんなが悔しがって悲しんだ。でもぼくは、親に食べられてしまった赤ちゃんグッピーのことをいい気味だと思つたし、理由はわからないけど、うらやましくも感じた。そして、ぼくは最低な人間なんだな、と自分のことをどこか冷ややかに眺めていた。

押野以外の友達も、ぼくを避けるようになった。あたりまえだ。ぼくが口をきかないからだ。ぼくはやつと覚えたクラスメイトの顔と名前を記憶から全部消したかった。押野は、辛抱強くぼくに話しかけてくれた。毎日のように、三丁目に誘ってくれた。ぼくは唇をかねで、首を横に振り続けた。バットとひび割れたグローブは、押し入れの奥にしまった。

「枝田くん。ちょっといいかしら。」

ある日、椎野先生に呼ばれた。② 教室から職員室までのリノリウムの廊下は、おそろしく無機質で、ひどく冷たかった。

「お母さんから聞いたわ。」

椎野先生の言葉は、まったくぼくとは関係なかった。ぼくは椎野先生の「えがお顔」をじっと見た。仕方がないことを、大人は II 聞いてくるのだ。

「枝田くんが五年生になって、とても男の子らしくなって、立派になったのを、先生は大変うれしく誇らしく思っています。」 A

ぼくは椎野先生の顔を見つめるばかりだった。先生もぼくの顔をじっと見つめていた。

「転校するのがいやなのね。」

ぼくは先生の顔をにらんだ。 I

「自分の思っていることを、きちんと口に出して伝えなさい。」

先生は、ぼくの目をまっすぐに見ていた。ぼくは怒りたいのか、泣きたいのか、叫びたいのかわからなかったけど、言葉を口に出す前に勝手に涙がこぼれ落ちた。ぼくはあわてて目をこすった。でも、涙は次から次へと流れてきて、ぜんぜん追いつけなかった。声を出そうとしても、ぼくののどからは、ひっくひっくという音しか出なかった。

「転校するのがいやなのね？」 U

ぼくはしゃくりあげながら、小さくうなずいた。それから先生は、あつという間にぼくを引き寄せて、ぎゅうっと抱きしめた。思いがけず力強く、ぼくはびっくりして、そして安心して、それから、もつともつと涙がこぼれた。 I

大人は、ぼくの A カンチ しないところで勝手に行動をして、ぼくは、それをずるいと感じていたけど、それは同時に尊敬することでもあった。あの頃は、世の中がどういうふうになり立っているのかまったくわからなかったし、大人というのは B ゼツタイ テキ 存在だった。

そのあと、母さんと椎野先生との間で、どういうやりとりがあったのかぼくにはわからない。③ 話は、またべつの方角へと動きはじめていた。

「光輝が決めなさい。」

と、母さんは言った。④ 怒ってるふうでもなく、いいかげんな感じでもなく、それこそ、仕方がないのよ、という顔だった。

「どうしても転校したくないんだったら、ひとつだけ方法があるの。」

母さんの声は、ぼくの胸にぜんぜん響かなかった。もう、なにをどうしたって、ぼく
の力が及ばないのはとうにわかっていたから。その頃には、母さんの新しい仕事はどう
いうものか、おぼろげながらもわかっていた。

みどりさんが頻繁にやってきては、これからのことを話していったからだ。だから、
ぼくはそっちのほうが気になっていた。新しい仕事。それは悪い予感だった。

「今まで黙っていたけど。」

母さんは、ぼくとは目を合わせずに、テーブルの上に置いてある新聞紙に目をやりな
がら言った。母さんの視線をたどった先には、『長期』と太字で書いてあった。その
先は難しい漢字ばかりでぼくには読めなかった。

「光輝には、おじいさんがいるの。」

最後の言葉を言ってから、母さんはようやくぼくを見た。ぼくは、ぼけつとしていた
と思う。言葉は耳をすり抜けてゆき、ぼくの頭の中には、やっぱり母さんの新しい仕事
のことがひっかかっていた。

そもそも、母さんが占い好きなのは昔からだだった。うちには、星占いや血液型占い
やさまざまな漢数字が書いてある難しいタイトルの本がいっぱい置いてあったし、一緒
に連れられて、有名な手相の先生にみてもらうのに、一時間以上路上で並んだこともあ
る。よく当たるというタロット占いにも行ったし、姓名判断や家相、人相、白装束を
まとった人が天からの声を聞く、というのにも行ったことがある。ぼくは、遠い昔の、
母さんが淹に打たれる姿をぼんやりと思い出していた。

⑤ 肌で感じるぞわぞわとしたものが、予感となつてぼくをぐるぐる巻きのがんじがら
めにした。

「光輝、聞いてるの？」

母さんが少し大きな声を出した。

「おじいさんがいるのよ。」

おじいさん？ いったいなんの話だろう。

「おじいさんは、実はこの近くに住んでるの。光輝のことも知ってる。」
「だれ？」

くしゃくしゃの顔をした人食い鬼のような年寄りを想像した。曲がりくねった杖を
振って、母さんを瞬く間に魔女にしてしまうのだ。

「だから、光輝のおじいさんよ。母さんのお父さん。」

ぼくのおじいさん？ 母さんのお父さん？

「光輝も前に一度だけ会ったことがあるわ。」

人食い鬼のイメージはすっと消えた。そして、ぼくの小さな頭の中から、記憶の断片
が次々と出てきた。

夏。

古い大きな家。

麦わら帽子。

ホースから飛び出るしぶき。

土の匂い。

それらの断片は、ひとつひとつがとても力強く、魔女にされた母さんは、一瞬に
してふつくらとした幸せそうな少女に戻った。

「もし、どうしても転校するのがいやだったら、おじいさんの家から学校に通えるわ。」

「え？」

「おじいさんの家から通えば、今の学校を転校しなくてもいいのよ。」

⑥ とたんに、ぶわーっと土の匂いが広がった。乾いた土に水をまいたときの、大地の
匂いだ。

そうして、ぼくは、おじいさんの家に住むようになったのだ。

(椰月美智子『しずかな日々』による)

注 *1 かたくながんこ。

*2 グッピー＝熱帯魚の一種。

*3 リノリウム＝ゴムの材質を使った床じき。

*4 タロット占い＝トランプカードの一種を用いて行う占い。

*5 白装束＝宗教上の儀式などに用いる白地の衣服・きもの。

(1)

I

 と

II

 に入る言葉の組み合わせとして最も適当なものを、次の中から選びなさい。

- ア I Ⅱ おそろく Ⅱ Ⅱ 平然と
イ I Ⅱ しょせん Ⅱ Ⅱ 容赦なく
ウ I Ⅱ どうせ Ⅱ Ⅱ 事細かに
エ I Ⅱ きつと Ⅱ Ⅱ 真つ向から

(2) ——— 線部①「この短かったたのしいときを、早く忘れてしまいたかった。」とありますが、それはなぜですか。最も適当なものを、次の中から選びなさい。

- ア あと少ししかないこの学校での生活を、あとから後悔しないようにすでに思いきり楽しんでいたから。
イ 楽しかったときを忘れることによって、これから始まる新しい生活に対して気持ちの整理ができるから。
ウ みんなとの楽しい思い出を傷つけることなく、そのまま大切に記憶の中にしまっておきたいと思ったから。
エ このままみんなと楽しい生活を送ってしまおうと、それだけあとでさびしく悲しい思いをすることになるから。

(3) ——— 線部②「教室から職員室までのリノリウムの廊下は、おそろしく無機質で、ひどく冷たかった。」とありますが、この表現についての説明として最も適当なものを、次の中から選びなさい。

- ア 先生に呼ばれた「ぼく」が、深い悲しみの中で先生に助けを求めていることを表している。
イ 先生に呼ばれた「ぼく」が、先生に何を聞かれるのか不安を感じていることを表している。
ウ 職員室に向かう「ぼく」が、あきらめの気持ちでさめた思いを抱いていることを表している。
エ 職員室に向かう「ぼく」が、自分の身の回りの様子を冷静に観察していることを表している。

(4) 次の一文は、もともと文章中にあったものをぬき出したものです。どこからぬき出したものですか。文章中にある記号 **ア**、**エ** の中から最も適当なものを選んで答えなさい。

椎野先生の顔から「えが顔」が消えた。

(5) ——— 線部③「話は、またべつの方向へと動きはじめていた。」とありますが、どのような方向に動きはじめていたのでしょうか。次の文の空らん指定された字数で適当な言葉を補って答えなさい。

(二字) をしないで、 (十字～十五字) する方向。

(6) ——— 線部④「怒ってるふうでもなく、いいかげんな感じでもなく、それこそ、仕方がないのよ、という顔だった。」とありますが、このとき「母さん」は、どのように考えているのでしょうか。最も適当なものを次の中から選びなさい。

- ア 転校をいやがる息子の本当の気持ちに気付いて、新しい仕事を始めるのはあきらめるしかないと考えている。
イ 息子が納得できないようなら、子どもの気持ちを大切にしながら今後のことを決めるしかないと考えている。
ウ 親子が離れて暮らすことになるのはつらいのだが、仕事のためにはそれも仕方がないと割り切って考えている。
エ 子どもの今後の生活については先生と相談して決めていたので、そのとおりに事を運ぶしかないと考えている。

(7) ———線部⑤「肌で感じるぞわぞわとしたものが、予感となつてほくをぐるぐる巻きのがんにがらめにした。」とありますが、このときの「ほく」はどのような状態だったと考えられますか。最も適当なものを、次の中から選びなさい。

ア 母が始める新しい仕事に対する強い不安にとらわれて、目の前にいる母の言葉が耳に入らなかった。

イ 突然祖父の存在を知らされた驚きでほんやりしてしまい、意識が現在から過去へと遠のいてしまった。

ウ どう言われても離ればなれに暮らすことはいやだという思いが強く、母の言葉を聞こうとしなかった。

エ 新しい仕事は母が好きだった占いに関係していることがわかり、急に母のことが心配になつてしまった。

(8) ———線部⑥「とたんに、ぶわーっと土の匂いが広がった。」とありますが、これは「ほく」がどのように感じたことを表していますか。最も適当なものを、次の中から選びなさい。

ア ばらばらだった記憶の断片がつながり、おじいさんのことをなつかしい思い出として感じる事ができた。

イ おじいさんの記憶がよみがえるとともに、気がかりなことが解決した喜びをしみじみと感ずることができた。

ウ かたくなだった心がいつべんにやわらいで、幼かったころの記憶が実感をもとなつて生き生きと感ずられた。

エ 母の言葉でふとわれに返り、母と暮らしてきた過去の記憶が次々とよみがえつてきてなつかしく感ずられた。

(9) 文章中のA **カンチ**・B **ゼッターテキ**を漢字に直しなさい。(ハネやハライなどの点画もきちんと書くこと。)

【三】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

自然を守るための善き行いは、「花や虫をとらない」「木や花を植える」「鳥や獣にえさを与える」——それは、時には正しいことはあっても、多くの場面ではむしろ、人々を自然にとって有害な行為に導く思い違いである。

次の二つの風景を思い浮かべてほしい。

一つは、河原の自然の植生、もう一つはそれを刈り払い整地して育てたコスモスのフラワーベルトである。コスモスの花いっぱい風景を「すばらしい自然」と感じる人もいるだろう。

しかし、①「生物多様性」の視点からのぞましいのは、むしろ前者である。

河原一面に外国原産の園芸植物のコスモスを植えてフラワーベルトにする、里山の雑木を伐つてソメイヨシノ（園芸品種のサクラ）を植える、などは、「生物多様性の保全」という目標に照らせば、②つつしむべき行為であることが少なくない。なぜそうなのか。

河原や里山が、人間がつくりだした園芸植物を植えた都市の公園や庭と異なるのは、そこに多様な野生植物で構成される植生（生態系における植物からなる部分）があり、それらの植物（生産者）に依存して、多様な動物（消費者）や微生物（分解者）がくらしているという点である。

野生植物は、その場所に適応しているもの、1、③その場所の自然環境のふりかけられて選ばれたものが生き残り、生育している。それらの植物の種類や量によって、生態系としての機能や安定性、そこでくらせる動物や微生物の種類が決まる。たとえば、植物食の昆虫など植物を食べる動物は、植物なら何でもえさにできるわけではない。植物は、かたい細胞壁、毒、トゲなどで身を守っている。動物は、特別な口の構造、生理的な解毒のしくみなどでそれらの防御を打ち破ってはじめて、その植物をえさにすることができる。

動物には、何種類もの植物を食べることのできるジェネラリストがいる一方で、チョウの幼虫のように食草や食樹が決まっているスペシャリストもいる。2、ナミアゲハの幼虫はサンショウやカタタチなどミカン科の植物、キアゲハの幼虫はミツバやセリなどのセリ科の植物しか、えさにできない。

そのため、植物の種類が多ければ多いほど、そこには多くの植物食の動物や、それらをえさにする動物がすむことができる。

それは、④菌類など、ほかの生物の死骸や落ち葉・ふんなどの排出物を土にかえすは

たらきをもつ分解者についても、同様である。枯れ葉の種類によって、それらを分解できる小動物や微生物の種類が異なる。したがって、多様な野生植物からなる植生は、多様な動物や微生物を宿することができる。

それを特定の園芸植物だけの単純な植生に置きかえれば、そこでくらせる生物の多様性は大幅に減少する。またそれにもなつて、生態系の性質もそのはたらきも大きく変化する。

また、近年では、管理が容易なようにコンクリート三面張りにした河川や水路が多く見られるが、⑤水から陸への環境のゆるやかな変化が失われると、多様な植物からなる植生が失われるだけでなく、それらに依存する多くの昆虫や小動物の生息環境が失われる。

（鷲谷いづみ『生物多様性』入門）による）

注 *1 植生 Ⅱある地域に集まって生育している植物の全体。

*2 生態系 Ⅱある場所に生きる生物とそれらを生育させる環境のまとまり。

*3 細胞壁 Ⅱ細胞（生物を組織する単位）を包む膜。

(1) 1 と 2 に当てはまる言葉を、それぞれ次の中から選びなさい。

- ア むしろ イ たとえば ウ やはり
エ もつとも オ すなわち カ もちろん

(2) 線部①「『生物多様性』の視点からのぞましいのは、むしろ前者である。」とありますが、「『生物多様性』の視点」とはどのようなものですか。最も適当なものを、次の中から選びなさい。

- ア 自然環境の中で、多くの種類の生物が存在している状態を大切にしようとする視点。
イ 外国原産の生物を積極的に持ちこんで、たくさんの生物を生育させようとする視点。
ウ 自然環境の中で、絶滅^{ぜつめつ}してしまいそうな貴重な種類の生物を守っていこうとする視点。
エ 外国原産の生物が混入しても取り除かず、様々な種類の生物を共存させようとする視点。

(3) 線部②「つつしむべき行為であることが少なくない。」とありますが、これを言いかえた表現として最も適当なものを、次の中から選びなさい。

- ア その行為をつつしむことがあってもよい。
イ その行為はつつしまなくてもかまわない。
ウ その行為を必ずつつしまなければならない。
エ その行為はつつしんだ方がよいことが多い。

(4) 線部③「その場所の自然環境のふりかけられて」とありますが、これはどういうことを言っていますか。最も適当なものを、次の中から選びなさい。

- ア その場所の自然環境に根付いてきて
イ その場所の自然環境に対応してきて
ウ その場所の自然環境の中で変化し続けて
エ その場所の自然環境の中で勢力を増してきて

(5) 線部④「菌類など、ほかの生物の死骸や落ち葉・ふんなどの排出物を土にか

えすはたらきをもつ分解者についても、同様である。」とありますが、「同様である」とはどういうことですか。最も適当なものを、次の中から選びなさい。

- ア 動物と同様に微生物にも、ジェネラリストとスペシャリストが生息しているというこ
イ 植物と同様に微生物にも、ジェネラリストとスペシャリストが生息しているとい
ウ 植物と同様に微生物も、動物の種類が多ければ多いほど多くの種類が生息でき
エ 動物と同様に微生物も、植物の種類が多ければ多いほど多くの種類が生息でき
というこ
というこ

(6) 線部⑤「水から陸への環境のゆるやかな変化」とありますが、その変化が具体的に見られる場所はどこですか。文章中から漢字二字でぬき出して答えなさい。

- (7) この文章で述べている内容と合っているものを、次の中から選びなさい。
ア 破壊^{はかい}された生態系を回復させるためには、人間が積極的に自然に対して手を入れなければならない。
イ 自然を守るために、動物・植物・菌類の生態とそれらの間にある関係を科学的に証明する必要がある。
ウ 生物多様性を支える土台は植生であり、それが失われることによる自然環境への影響^{えんきやう}は多大である。
エ 「自然を守るための善き行い」と言われるものには、人間を危険にさらすことになるものが含まれている。